

乳幼児の造形における非認知的能力の育ちと変容

—— 保育案を分析して ——

Growth and Transformation of Non-Cognitive Abilities in Young Children :
Analyzing Plans of Art in Early Childhood Education and Care

丁 子 かおる
CHOJI Kaoru
(和歌山大学教育学部)

2021年9月21日受理

Abstract

In recent years, attention has been focused on the development of non-cognitive abilities in early childhood education and care, but research has just begun on the relationship between non-cognitive abilities and the practice and those content, and what the child is doing based on teachers records. The current situation is that they are only recorded individually as evaluations by ECEC teachers who have done so. In this study, we will analyze based on childcare plans, and visualize and consider the non-cognitive ability and its growth seen in the holistic playful Art, understanding the non-cognitive skills of 0 to 6 years old in ECEC.

キーワード：乳児、幼児、造形、非認知的スキル、幼児教育、保育

1. はじめに

近年、乳幼児教育における非認知的能力の育成に注目が集まっている。ただし、その非認知能力と保育の実践や内容、子どもの姿との関連については、研究が始まったばかりで、保育記録を基にした保育者による個別の記録と評価に留まっている現状がある。そこで、本研究は、保育園、こども園での保育における0～6歳の非認知的スキルについて理解するために、保育内容としてのホリスティックな乳幼児の造形の遊びを対象として、園内研修及び研究会にて各担任が作成した保育案を基に分析を行い、その中でみられる非認知能力とその育ちについて可視化し、考察する。

2. 幼児教育無償化と保育の質

国内では幼児教育の無償化が2019年10月より実施され、3歳以上の幼児教育施設に通う幼児と住民税非課税世帯の0～2歳児の利用料がすべて無償となった。その根拠となったのが、ペリー就学前プロジェクト¹やアベセグリアンプロジェクト²等などの長期的な幼児教育研究である。ペリー就学前プロジェクトの対象は3・4歳児の幼児、アベセグリアンプロジェクトの対象は参加時で平均4.4ヶ月から8歳までの乳児と幼児で、どちらも質の高い幼児教育プログラムを受けた子どもと受けていない子どもについて長期的な追跡調査を行っている。その両調査とも、質の高い幼児教育を受けた子どもは比べて学歴、収入、持ち家率が高く、

生活保護受給率や犯罪数も少なかった。また、アベセグリアンプロジェクトでは、うつ病や喫煙率が低いなどの健康に対してもよい影響があることが報告されている。ペリー就学前プロジェクトは現時点で50才までの報告が公表されている。このように、質の高い幼児教育は子どもたちのその後の人生において影響するとされている。

ただし、これらのプロジェクトにおいて重要なのは単に子どもが幼児教育を受けることではなく、「質の高い」幼児教育・保育を受けることである。そこで、保育の質とその基準について述べておく。OECDでは保育の質と規制について、「志向性の質」、「構造上の質」、「教育の概念と実践の質」、「相互作用あるいはプロセスの質」、「実施運営上の質」、「子どもの成果の質あるいは成績の規準」、「親・地域への支援活動と両者の参加に関する妥当な基準」を挙げており³、保育の質は、保育実践から制度、子どもから親、地域といった広い範囲を指している。これを受けて秋田・佐川は、「保育の質は、その文化が保育の機能や方向性をどのように捉え価値づけているのかという社会文化的な価値判断に依存する」としている⁴。

また、秋田は『OECD保育の質向上白書』⁵を基に「保育の質」は、社会的に構成された概念であり、国の文化的信念や価値に依存し、多角的なものであることが前提となっている」ともしている⁶。OECDはこの白書で、保育の質が目標を持つことの重要性について述

べており、保育の質を達成するための側面として、保育環境における「最低基準」、「カリキュラム」、保育に従事する「労働力」、「親と地域社会の関与」、「データ収集・調査研究・質のモニタリング」の項目を示している⁷。

保育の質について目標を持つことは、その国の幼児教育・保育の全体像を提示でき、そのことで必要なプログラムの財源を増やす政策意思を統合し、政府に向けての誘導策を探る提案を可能とする。結果、国が社会的・教育的目標の共有を図ることで一貫性のある調和のとれた子ども中心のサービスの推進、提供ができ、事業者、実践者、学生、保護者への説明や方向づけとなる共通の目的を持てることで、サービスの断片化を防ぐことになるという⁸。

つまり、保育の質は、多様な側面を持って構成されており、その国の文化や社会によって違いはあるものの、全体として目標を立てて必要に応じて改善されていくことが求められているといえる。そして、そのためにも「データ収集・調査研究・質のモニタリング」が重要となる。データを基に現状把握や課題を理解し、調査や研究を行い、質の定期的確認がされることで、保育の質の向上が期待されているのである。

3. 保育の質の向上に向けた現状の理解と課題

次に、保育の「構造上」の質から述べることにする。現在、日本ではコロナ禍の影響で前年度の2021年度の出生総数は激減し、始めて80万人を割ることが妊娠届出者数から予測されており、一層の少子化の加速が問題となっている⁹。ただし、幼児教育・保育制度改革としては、少子化の加速と同時に、認定こども園の増加等の対策から問題とされている待機児童の減少が報告され、保育の量的確保については改善がみられてきた。しかしながら、地方公共団体ごとの幼児教育センターの設置やキャリアアップセミナーなど研修の実施や、評価への取り組みなど保育の質的確保の改善は途上であり、園や地域に差があり未だ課題は残されたままである。

質の高い幼児教育・保育の提供は重要であるにも関わらず、現在の幼児教育無償化による家庭の負担を軽くする直接的給付中心の対策では質の改善は難しく、先のOECDに挙げられた側面であれば、「教育の概念と実践の質、相互作用あるいはプロセスの質、実施運営上の質」といった、労働上の待遇や環境の改善、研修の実施といった幼児教育施設や保育者の保育実践の改善などへの間接的投資や対策が進まないことには幼児教育のもたらす効果は限定的であると言われて¹⁰。

このうち、一人一人の保育者が意識的に改善を図ることで、子どもたちに直接的に影響をする教育の考え方、教育方法、アプローチと省察、評価といった「教育の概念と実践の質」の改善については保育者が取り

組みやすくかつ重要であるものの、その根拠となるデータ収集や・調査研究が十分ではないという課題も残されたままである。

4. 非認知的能力を育成する保育モデル

近年、先のペリー就学前教育のプロジェクトの結果から、幼児教育・保育において非認知的スキルに注目が集まっている。ペリー就学前教育などでは、IQのスコアにも影響があったが、8歳前後には、その差は消失していることが要因である。乳児期・幼児期に非認知的能力の育ちが就学後の児童の学習意欲や継続的努力につながり、その後の高等教育への進学と修了を向上させ、所得と失業など学歴、犯罪率や年取、持ち家率などや労働市場における成果から、人生そのものへの影響があるとされたのである¹¹。

そして、非認知的能力を含む社会情動的スキルは、人々の健康状態や子どもの問題行動、生活の満足度、大学進学後の利益の大きさ、自尊心など多様な社会的成果に大きな影響があるとされている。そのため、社会情動的スキルが、「一般的に、スキルの分布全体にわたって、子どもの人生における成果を伸ばす」こと、「恵まれない子供たちの将来の展望を好転させる機会を提供する」こと、「誠実性、社交性、情緒安定性は、選択された国々や文化全体において重要な社会情動的スキルである」と指摘されている¹²。

非認知的能力や社会情動的スキルに注目が集まる中で、幼児教育ではこれまでも何をどのように重視するかという議論は国内でもこれまでに続けられている。特に保育形態として自由保育と設定保育、指導方法として子ども中心か保育者主導か、一斉指導中心と環境重視で個別への援助中心かといった議論である。ただし、幼稚園教育要領等では「環境を通して行う教育

表1 OECDによる「アカデミックなカリキュラムモデルと包括的カリキュラムモデルの効果」(抜粋)

いずれの「モデル」がより効果的か	アカデミックモデル	包括的モデル
IQスコア	○	
学習の動機付け		○
読み書きと算数	○	
創造性		○
自立性		○
具体的知識	○	
自己信頼感		○
幅広い知識		○
自発性		○
短期的成果	○	
長期的成果	○	○

（及び保育）」が基本または特性とされていることから¹³、日本では保育者という人的環境やおもちゃや遊具、材料や素材、自然環境など物的環境、空間環境等が広く含まれており、そのいずれも環境を通して子どもの育ちを促すという意味で、生活に基盤を置いた包括的な保育を行っている園が多い。そもそも幼児教育には小学校のように教科書も、決まった指導の方法もないため、子どもの学びを捉えることは容易ではない。保育の質や保育者の質も先にも説明してきたように国によって考え方が異なっている状況がある。

世界各国における幼児教育・保育のカリキュラムについてみると、OECDは「アカデミックなモデル(教科学習の基礎スキル重視型)とより包括的なモデル(総合的もしくはホリスティックな発達重視型)」に伝統的に分類されてきたと説明する¹⁴。アカデミックなモデルでは、「小学校の準備のための認知的目標をもつ教師主導型のカリキュラム」が用いられるとし、「主要科目の教授をしっかりと規定するが、主体的活動・創造性・自己決定によって特徴づけられる子ども中心の環境設定には制限が加わる」とする研究成果を紹介している。

そして、「包括的アプローチ」は、子どもを中心に置きホリスティックな発達とウェルビーイングのために視野を広げようと(表1)としながらも、「もっと柔軟な目標設定をする包括的なアプローチでは、社会情動的なウェルビーイング、幅広い知識、コミュニケーションスキルなどを一体的にとらえるが(中略)学習の基礎的スキルの獲得に焦点を合わせ損なう危険性」を指摘している¹⁵。

また、タイプの違うECECカリキュラムが学校での行動に与える影響についても紹介をしている。Schweinhart and Weikartによる研究を基に、直接的教え込みを行う保育と構成主義の子ども中心主義のTHE HIGH/SCOPEプログラムと、社会性重視の子ども中心主義で伝統的な保育園に通った68人を抽出し比較したところ、15歳または23歳までは大きな違いは見られなかった。しかし、15歳児の非行行為は、THE HIGH/SCOPEプログラムを受けたグループと比べて保育園のグループが1.4倍多く、直接的教え込みグループが2.5倍と多かった。また、直接的教え込みのグループは、23歳時点において重犯罪で特に財産犯罪を伴う逮捕経験がTHE HIGH/SCOPEプログラムのグループより3倍多く、学校に通っている時点でも情緒障害などは、直接的教え込みグループは子ども中心主義の両グループよりも8倍近く多くなっていたという。このことからSchweinhart and Weikartは、幼児期における直接的教え込みの保育に警告をしている¹⁶。

結果としてOECDでは学習分野と実施上質の高いECECの環境は、「認知と社会性の発達は、相補的な関係にあり、どちらも重要だとみなすカリキュラムの実践と関連している」としている¹⁷。

そして、国内の幼児教育・保育では学びの基礎を育む側面と非認知的能力の育成が同時に行われており、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で明示され求められたように、その認知的側面も非認知的側面もこれまで包括的アプローチとして保育者は緩やかに意識して実践が行われてきたと考えられる。

5. 研究の対象としての「造形の遊び」

そこで、本研究では乳児や幼児が日常的に遊びを行う造形の遊びに着目し、非認知的能力を考察していく。

造形の遊びは0歳においては3つの視点のうちの「身近なものとの関わり感性が育つ」視点、1～2歳、3～5歳児では、5領域で、領域「表現」において造形表現が実践されている。子ども達は「身近なもの」との関わりをきっかけに、友達や保育者と関わり、身振り手振りや表情、言葉で思いを伝え、人との関わり方を学び、自らを育てている。また、素材や環境との関わりから、例えば、「積み木を高く積むにはどのように積んでいったらよいか?」、「色水の濃さを調整するには水加減をどうすればよいか?」など数量や科学的な法則などの予想を立てて試行錯誤を行っており、造形は「身近なものとの関わり感性が育つ」視点や領域「表現」に限定されない。

小学校理科でも風やバネなどの動力で動くおもちゃづくり等が要領の内容に記載されている例や、社会科でも国宝や文化財が取り上げられ、国語科でも「風神雷神図屏風」の解説が取り上げられていることから分かるように¹⁸、造形や美術文化は幅広く取り扱われている。乳幼児期の造形は、それらの基盤にもなり、未分化でより汎用的で総合的な活動である。ただし、同時に造形の遊びは、乳幼児期と目的を少しずつ変えながら、小学校図工、中学校美術へとつながっていくという意味で、本研究も小学校へ繋がっている。

乳幼児はこうした遊びを通しての総合的な学びの過程で、認知的スキルはもとより、その学びの根本となる好奇心、自己主張、粘り強さ、協調性といった非認知的能力の育成を同時に行っている。

そこで、本研究は、このことに着目し、質の高い造形の保育では非認知的能力の育ちを研究会における保育案を対象として、非認知的能力の育みに当てはまる行為を抽出し分析することで可視化する。

6. 本研究の目的と方法

本研究では、造形の遊びの非認知的能力の育成という側面に着目し、保育中の姿について保育案の文章から抽出して分析し、年齢ごとの変化などについて明らかにする。

研究の方法は、2013年から2019年までの過去6年間を対象に保育造形研究会¹⁹において研究を行った6園を対象とし、園内研修及び研究大会までの時系列の0

歳から5歳児クラスまでの保育案(部分保育案で267件)について、それぞれの遊びを構成する「予想される子どもの姿」から保育者が期待し予測する非認知的能力の育成に繋がる姿や行為を抽出して分類し、分析する。

ところで、保育案から読み取れるのは「予想される子どもの姿」であり、実際に保育者がみとった姿ではない。しかしながら、保育造形研究会の指導案を対象とすることで、各園の各保育者は担当となる複数人の運営委員²⁰に保育案の相談をして、保育者の思いに沿った活動になるよう保育者と検討し改善をして立てられているため、子どもの育ちにつながらない保育や、作品づくりのための保育、ねらいのずれた保育などはあまりみられず、運営委員として筆者が関わってきた経験からは保育案の姿が概ね実現されることが多かった。また、「予想される子どもの姿」は、保育者の願いとそれに沿った援助の基に立てられているので、この姿を抽出して調査することは、保育者の願いについても読取り、分析対象になると考えた。

次に、子どもの非認知的能力の分類方法であるが、非認知的能力については、IQなど測れるものを除くすべてとなると、調査は困難である。そこで、非認知的能力について、パーソナリティ特性の主観的な指標であるビッグ・ファイブ尺度から人格要因「外向性」「協調性」「誠実性」「情緒安定性」「開放性」の5分類で行った²¹。下位項目としては、開放性(好奇心、創造性、創造性)、外向性(冒険性、社交性、自己主張、積極性)、誠実性(粘り強さ、目的の達成)、情緒安定(情緒的安定、自己調整)、協調性(協調性、共同性)等である。

7. 抽出と分類の方法について

そして、分類方法の抽出例を図1のように保育案にある行為からビッグ・ファイブに該当する行為を分類した。例えば、「想像する」「イメージする」「創造する」「好奇心」を持つ等の行為が開放性に分類される。ここでは、素材に興味を持ってできることを色々と試し、触って遊ぶ行為として、好奇心を持って関わる姿であり開放性に分類した。そして、図1にはないが、自分ができたことを友達や保育者に伝えたり、自分の思いを伝えようとしたりする行為は、外向性に分類した。はさみを1回切る行為を繰り返し行ったり、素材を繰り返し転がして落したりする遊びを行うなど、幼児なりの粘り強さやスムーズにできるようになるための繰り返しについても誠実性に分類した。(図1)そして、折り合いをつけるなどの自己調整が幼児期には重要とされるが、これについては保育者が予想して記載する保育案ではあまり見られなかった。ただし、片づけの場面において、それぞれの子どもが遊びを終える際に保育者が無理に終わらせることはなく、子どもの意思

例 A園 2歳 4月	
開放性 (好奇心)	・紙パックを開いてみたり、閉じたりと輪になっていることに気付く(好奇心)
外向性 (自己主張)	なし
誠実性 (粘り強さ・目標の達成)	・繰り返し行う (粘り強さの芽生え)
情緒安定 (自己調整・自信・情緒的安定)	○かごの中に片づける (自己調整)
協調性 (協同性)	なし

図1 2歳児紙パックの遊び分類例

で終わりを決められるように寄り添うことが多いため、図1でも自己調整の場面に分類した。また、保育者が共感的な言葉かけで安心して遊べるようにするような援助で情緒的安定が生まれる場面も、情緒的安定に分類している。また、遊びの展開として友達と一緒にする行為や、保育者と一緒にしようとする行為をここでは協調性や協同性に分類している。

ただし、造形の遊びでは、例えば幼児であれば、「はさみで画用紙を切る」といった道具の操作行為は、つくったりかいたりして創造していく場面の一部である。そのため、それら一つ一つすべてが創造性につながる可能性があるが明確ではないため、創造性についてはただ「折る」「切る」といった操作や行為のみでは抽出したり分類したりせず、「イメージしたお家をつくる」等、子どもの表現意図があると思われる場合にのみ分析対象とすることにした。

8. ビッグ・ファイブによる全体割合と推移

まず、267件の保育案の中からビッグ・ファイブに当てはまる行為をすべての年齢において抽出した割合を図2の円グラフに示す。その結果、開放性が57%と圧倒的に多く、次いで情緒安定15%、誠実性10%、外向性9%、協調性9%となった。

創造性や想像性といった造形では欠くことのできない行為は開放性の一部である。同時に、好奇心を持って関わっていくことも開放性であることから、造形活動が何かをつくることだけではなく、素材や材料の重さや手触り、色や形などに関わる、または関わろうとするところから開放性の育ちが始まっており、広い造形の育ちを捉えていることが分かる。

また、情緒の安定が15%なのは、乳幼児からの保育における養護が教育と一体的に行われているためと言える。ただし、人は不安な状態ではかいたりつくったり自己表現を自らしようとはしない。特に造形では、子ども中心の活動になるため情緒の安定がされていな

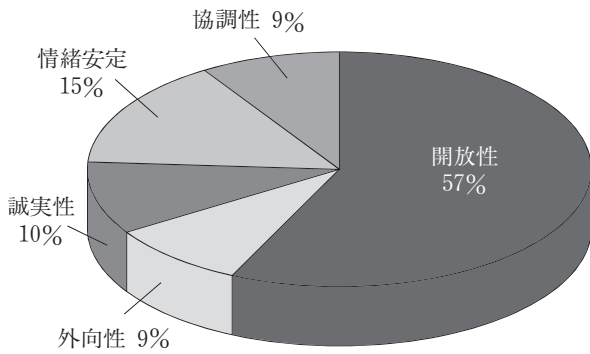


図2 総数内ビッグ・ファイブの割合

いと表現できないため、一定の割合があるのも理解できる。また、造形の遊びの中では、繰り返し試したり、好きな遊びを繰り返し行ったりして粘り強く遊んだり集中して遊ぶ姿があるため、誠実性に10%が分類されたことは決して少なくはない。また、外向性で、自分がつくったものや考えたこと、できたことを保育者や友達に話そうとする姿が9%あり、また、友達や保育者と一緒に活動する協調性の姿が同じく9%とあることは、乳幼児期の造形の姿では最初から最後まで一人で取り組むことがないという意味で妥当な数字である。

図3は、ビッグ・ファイブの下位項目及び年齢ごとの行為の推移である。開放性における想像性や創造性の項目は特に多く、それらは比べて少ないなど項目に偏りはあるものの、ビッグ・ファイブは全体的に一定程度認められる。また、想像性、創造性、協調性は、年齢に応じて多くなっていくが、好奇心は乳児で多く後に減少していくのが分かる。前者の想像性、創造性、協調性は幼児期の遊びにおいてみられる姿であり、後

者の好奇心は保育の初めの遊びだすきっかけとして、言語でイメージを持ちにくい乳児が素材や環境などの物に興味を持つことで遊びだすという理由から、このような推移が考えられる。

9. 研究の結果

ビッグ・ファイブのうち全体としてただ一人で作品をつくる活動はほとんどみられず、素材で遊んだり構成をしたり、つくったりかいたりしたもので遊んだり、遊びながらイメージを広げていく造形の遊びが多かった。そのため、年齢が上がるにつれて創造性や創造性に関わる開放性が自然と増加していっていくと同時に、情緒的安定は常にどの年齢でも一定程度見ることができ、教育と養護の一体化が常時行われていることが分かった。

また、協調性に関わる行為も増加していく傾向であるものの2歳からみられる。誠実性や外向性も一定程度確認されることから、今回対象として多く見られた造形の遊びではビッグ・ファイブの育ちが遊びのプロセスの中に意図されて年齢に応じて実践されていることが分かった。また、低年齢の乳幼児において、環境や素材に自ら興味を持って歩み寄り、素材を試していきこうとする「興味」や「好奇心」が多くあり「開放性」が多くみられたことは、ものに関わって遊びが始まることの多い乳児の遊びとイメージを持って遊びを広げる幼児遊びの違いを表していると考えられる。また、幼児では、年長児になるほど協調性と協同性の項目が増加していた。幼児の造形では一人でそれぞれがつくることだけでなく、幼児教育として協同性の育ちが求められていることが明確となった。

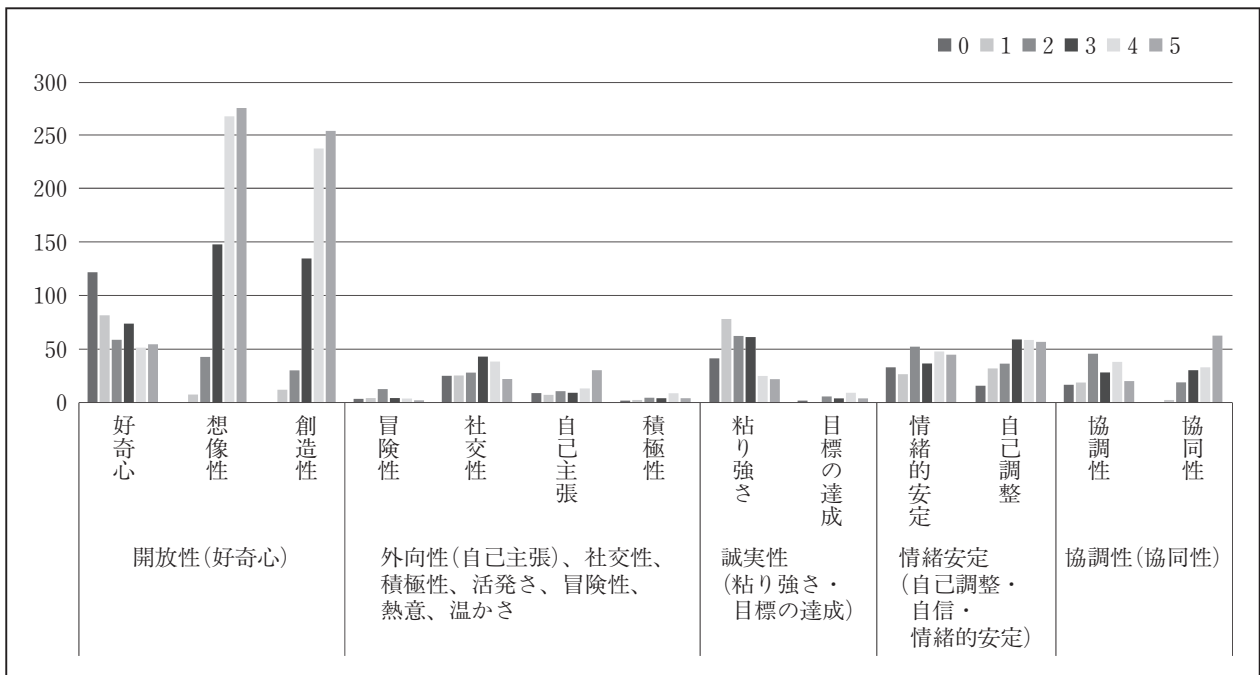


図3 年齢別ビッグ・ファイブと下位項目の推移

10. 終わりに

乳幼児期の非認知的能力について、保育園とこども園における0～5歳児クラスの造形の遊びについて保育案を基に分析をおこなった。その結果、ビッグ・ファイブでは、開放性の割合が6割近くを占めて多かったものの、それ以外の情緒安定や、誠実性、外向性、協調性においても9～15%と少なくはなく、バランスよくあった。このことから、乳幼児期の保育にみられる造形の遊びでは、開放性を中心としながらもそれ以外の力もバランスよく育まれることが意識されていることが分かった。

また、保育者は乳幼児期から興味を持ってものと関わっていくことで好奇心を持てるような環境構成を低年齢では多くしていたり、想像性や創造性は年齢が上がっていくにつれて多くなっていったりなど、開放性における育つ姿から育まれる非認知的能力にも違いがみられた。

今後は、専門的知見を基に、今回の分析の確認などを実施していくこと、乳児と幼児の項目別比較や、乳幼児期と小学校図工との比較、中学校美術との比較についても分析を行い、各時期における特性を視覚化することで、共通性と特性を明確化していくことが考えられる。そのことによって、保幼小中での共通理解がされ、それぞれの教育における接続がスムーズになることで子どもたちの学びが継続できることを願っている。

※本研究は、科研費番号17K04625「非認知的能力を継続させる育ちと学びの造形教育軸—材料用具による保幼小中接続—」の一部である。研究にご協力いただきました関係者の皆様に感謝します。

注

- 1 ジェームズ・J・ヘックマン『幼児教育の経済学』東洋経済新報社、2015
- 2 The Carolina Abecedarian Project, The FPG Child Development Institute of the University of the North Carolina at chapel Hill; <https://abc.fpg.unc.edu> (2021.9.5現在)
- 3 OECD『OECD保育白書 人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際比較』明石書店、2011, pp.148-149.
- 4 秋田喜代美、佐川早季子「保育の質に関する縦断研究の展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第51巻、2011, p.218.
- 5 OECD『OECD保育の質向上白書—人生の始まりこそ力強く：ECECのツールボックス』明石書店、2019
- 6 秋田喜代美「グローバル社会に向けた日本の保育のこれから」『保育学研究』第58巻第1号, p.137, 2020

- 7 OECD前掲5, pp.29-32.
- 8 同上, pp.29
- 9 「コロナ禍で少子化に拍車！出産激減で社会保障政策見直しの可能性も」DIAMOND online; <https://diamond.jp/articles/-/259803?page=6> (2021.9.5現在)
- 10 無藤隆, 第1部「国の報告を読み解く」「保育・幼児教育の質の向上のための政策—国の報告と自治体の先進事例から学ぶ—」日本保育学会, 保育政策検討委員会, 第1回公開シンポジウム, 2021.3.13
- 11 ジェームズ・J・ヘックマン前掲1, p.30
- 12 OECD/Benesse『社会情動的スキル 学びに向かう力』明石書店, 2018, pp.69-94, p.95.
- 13 文部科学省『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 2018, pp.28-29, 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館, 厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館, 2018, p.15
- 14 OECD前掲5, pp.95-96.
- 15 同上
- 16 Schweinhart, L. J and D. P. Weikart “THE HIGH/SCOPE PRESCHOOL CURRICULUM COMPARISON STUDY THROUGH AGE 23” *Early Childhood Research Quarterly*, Vol.12. 1997, pp.117-143.
- 17 OECD前掲5, p.96.
- 18 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)』東洋館出版社, 2019 p.52, 97, 101で理科「内容の取扱い」で「A物質・エネルギー」の指導に当たっては、3年生では「3種類以上のものづくりと行うものとする」、4年生では「2種類以上のものづくりと行うものとする」の、国語科6年生光村書籍「鳥獣戯画を読む」、社会科でも4年生で地域の伝統や文化が取り上げられている等。
- 19 保育造形研究会は、公益財団法人美術教育振興会による後援で、大阪で2004年よりほぼ年に一度、0～6歳までの乳幼児を対象に保育園や認定こども園にて公開保育と研究協議などを行う。大学教員、保育者などで構成された運営委員によって運営されており、その年度協力する園を対象に公開保育を行っている。また、公開保育は、各運営委員が月一程度、園内研修に参加して保育者とともに保育の協議と検討などを行っている。美術教育振興会の事業の一つである幼児を対象とする研究会、幼児造形koyasan集会和並び実施されている。(幼児造形koyasan 集会; [koyasan1](https://stream6.wixsite.com/koyasan1))
- 20 保育造形研究会の運営委員は、乳幼児の保育としての造形に興味と実績がある大学教員と保育経験が豊富で保育の力量が特に秀でていることで推薦された保育者で構成されている。
- 21 ブライアン・R・リトル, 自分の価値を最大にするハーバードの心理学講義』大和書店, 中室牧子『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2015, p.87やOECD/Benesse『社会情動的スキル 学びに向かう力』明石書店, 2018, p.53など。ビッグファイブは、性格心理学において基本的な枠組みであり、性格特性である。性格特性と忍耐力や想像性といった力などすべてが非認知的能力といえる。ただし、ここではビッグファイブに限定して取り上げる。